

令和2年度練馬区立光が丘さくら幼稚園学校評価報告書

練馬区立光が丘さくら幼稚園
園長 檀原 雅恵

1 自己評価結果

(1) 概要

保護者アンケートは全員の方から回答を得て、100%の回収率となり、全保護者の意見を集約し考察することができた。このことは、園の教育について保護者の関心が高いことが読み取れる。幼稚園の教育活動全体については、どの項目についてもA、Bの肯定的な評価が90%以上であったことは、概ね達成されていると評価している。「特色ある教育活動」では2項目に対し全員の方が肯定的な評価となった。「幼稚園の教育目標を概ね達成している」90%の方から肯定的な評価となった。また、「保護者・地域とともに歩む教育活動について」は2項目で全員の方が肯定的な評価となった。今年度は東京都教育委員会、練馬区教育委員会のガイドラインのもと、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を徹底し、方法を変えての行事の実施、中止、保護者には来園を制限し、限られた中で教育活動を進めることになり、例年とは保護者の保育参加、保育参観など家庭と園の連携項目については比較が難しい状況もあった。

また、幼稚園に対する様々な思いを自由記述欄から読み取ることができ、幼稚園を温かく支えてくださっていることと受け止め、改善の視点として参考にしていきたい。

【成果】

- 教育目標の「自分で考えて行動する子供」の項目が、昨年度と比較すると肯定的な評価が10%アップした。様々な行事が自粛、中止になった中、主体的な遊びを通して自分で考えて行動することが多くなり、遊びの継続、充実をしっかりと確保できる時間の保障と援助の工夫などの環境があったと思われる。そのため、保護者地域とともに歩む教育活動については「子供が笑顔で登園することは、親として喜びであり子育ての励みとなっている。」の項目は肯定的評価が100%の回答を得ることができ、遊びの充実を幼児自身も感じて、楽しみに幼稚園へ通ってきていることが分かる。
- 本園の特色ある教育活動として「豊かに感じ表現する子供を育む」教育を推進した。発達に必要な心揺さぶられる直接体験や自然体験できる環境を構成し、主体的な遊びや夢中になって遊んでいると捉えた幼児の姿から幼児期の資質、能力の育成、その中の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として年齢やその時期に応じた育ちを読み取りながら分析し幼児理解を深めた。このことをかわら版としての写真掲示を頻繁に行い、降園時の保護者への連絡、園だより、さくらトーク等で保護者へ「見える化」「分かる化」により理解を得られたことが分かる。担任も作成しながら、保育を分析し、分かりやすく発信することを心掛けたことで、保育を深く考察する力がついてきた。さらに幼児の遊びや生活を充実させるための教師の援助についても協議し実践に繋げた。
- 園内研究では、「遊びの充実に向けた環境の工夫 ～つなげる・つながる保育を目指して～」をテーマとして講師に指導を受けながら研究を進めた。それぞれの環境の構成を考える切り口を大切にし、試行錯誤しながら、教師が主体的に研究を進めることができた。記録により、共有を深め、教職員がチームとなって保育をしていくことを学び、チーム力を高めることができた。
- 担任には新規採用教諭が加わった。園務主任のリードや副園長の指導で、学年の担任同士の情報共有、介助員を含めた全職員体制での対応等、幼児一人一人への理解を深め同じ方向に向か

い教育活動に臨めた。また、介助員、預かり保育の保育補佐員や今年度で事業が終了する3歳児一年保育の職員との連携では、情報共有、掲示や連絡による確認など行い、幼稚園の教育を中心に互いの立場を尊重し信頼関係を土台にきめ細かな援助に努めてきた。

- コロナ禍の中でも感染症防止対策を講じて、学校支援コーディネーターによる地域人材の特技を活かした関わりにより、保育が充実し、つながりができたことは成果があった。

【課題】

- 保護者と共に育つ幼稚園を目指している中、園だより、さくらトーク、かわら版等での保育の見える化を努力し、保護者の保育への理解は得られたが、コロナ禍の中、保護者が困ったり悩んだりしたときに相談、実際の保育を同じ空間で感じるができない等直接的な理解についての課題があがった。教員からも保護者との連携について今後の方法を模索していきたいと課題があがった。
- 教育目標達成状況の評価で「あまり思わない」が5%程のマイナスの評価があることに目を向けていく。
- 地域情報、安全の情報発信についてマイナス評価が10%あることを課題としていく。

【改善策】

- 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策としての新しい生活様式の中、保護者との連携の機会を対面ではない、ホームページの更新、ZOOM、YouTubeなどのICT機器の利用等とともに、直接関わるができる内容も検討していきたい。
- 教育目標は長いスパンでの幼児の成長をしっかりと伝えることが必要となる。日々の生活の伝え方だけでなく、学期末や学年末の保護者会や手紙などでの分かりやすく伝える。
- 地域情報、安全情報の発信は掲示の仕方に工夫をして分かりやすく、見やすく行っていく。

根拠となる資料

自己評価総括表（表1） 保護者アンケート集計結果（添付資料1）

2 学校関係者評価

(1) 総括

【成果】

- 新型コロナウイルス感染症対策で今年度は大変だったが、幼稚園は行事等できることをやっという姿勢がよく、幼児たちの豊かな心が育っている。幼児の発想力がすばらしい。それを支える教師がとてもよい。幼児は様々な行事へ力を発揮していることを感じる。
- かわら版の写真を見るとマスク以外は例年と同じさくら幼稚園らしい保育と幼児の育ちを感じる。
- 教師間の関係がよく、チームさくらとして教師の目標をつくり一人一人が頑張る姿がよい。そして、教師の仲のよさが保護者にチームさくらが伝わるといよい循環がなされている。
- 基本的な生活習慣である挨拶を幼児がよくするようになり、地域と幼稚園を幼児が結ぶ姿がある。
- 写真のかわら版が分かりやすい。保護者への伝え方が具体的で分かりやすい。
- 未就園児の会が地域とつながっている。

【課題】

- 人との関わりが大事な幼児期であるのに、マスクをするこのご時世人の顔の表情が読み取れない障害が出ていると言われる。新しい生活様式の中、マスクのある人との関わり方を考えていけるといい。また、様々な人との関わりができることで幼児が自分を出す多様な場面が出てくることを願う。

- コロナ禍だからできないことよりできることを見つけて、この経験をしたからこそできることを見つけれられるたくましい幼児に育ててほしい。そして、イベントがあることが主体性を育てることではない、普段の保育に力を入れてほしい。
- 教職員集団としてのチームさくらは人数が多いが、しっかりと団結して頑張してほしい。その中でモデルとしての大切さを意識し、言葉の基本は挨拶と考え、日々の挨拶を大人がモデルになって行っていけるとよい。また、幼児の育てたい目標をしっかりと共有して、人数の多い教師がチームさくらとしてしっかりと団結して頑張してほしい。その中で幼児たちの発想の豊かさにつながるよう教師の持ち味を生かしてほしい。
- ホームページの活用を考えていくとよい。
- 保護者同士の関係づくりが距離を取ることで難しかった。来年はこれならできるを探してほしい。特に園庭開放が保護者同士をつなぐよい機会であるので、できるだけ実施してほしい。
- 地域への関わりに力を入れて顔が分かる関係性を積極的にしてほしい。地域の行事参加なども含めて考えてほしい。未就園児の会の回数が1ヶ月に2～3度あると未就園児の保護者同士、地域との関係がよくなると思われる。

【改善策】

- 教育活動について
 - ・豊かな経験が行事だけではない日々の遊びから培われるということを改めて確認し、日々の保育がつながり次の日の保育に反映させていく。
 - ・コロナ禍の中での視点を持ち、言葉や表現による伝え合いを日々の保育の中でどのように構築していくのか改めて考えていく。
 - ・日ごろの生活習慣を見直し、人との関わりを大事にし、幼児一人一人の個性を認め、自己肯定感を感じられる教育を推進する。
- 教員の経営参画
 - ・日ごろの伝え合いを大事にし、同じ目標に向かって保育を進められるよう協働性、信頼関係、同僚性の構築を高めていく。
 - ・教員一人一人が自己肯定感を持ち、積極的にアピールできる機会をつくっていく。そのことが、幼児たちの心の豊かさ、遊びの豊かさにつながる保育になるよう全体で共有していく。
 - ・今年度からの園内研究のテーマである「遊びの充実に向けた環境の工夫」について研究を進めてきていることを活用し、教員集団としての意識の向上、研究心、探求心を高め、保育の向上へつなげる。
- 子育て支援体制
 - ・写真掲示の分かりやすさを支持し、今後も写真による保育内容の発信を工夫しながら続けていく。
 - ・ホームページへのアピールの仕方を再検討していく。
 - ・地域との関わり方を再考しながら、今できること、教職員の地域への日ごろの挨拶の徹底、行事の早めの掲示での周知を行っていく。また、地域の方と連携してつながれる行事の参加方法、保護者と地域をつなぐ方法を考えていく。
 - ・保護者同士の交流の場を新しい生活様式の中で再考し、できる部分を実行していく。

(2) 根拠となる資料

学校関係者評価一覧表（表2）

3 評価結果の公表等

- ・事前に資料を配布し、2月25、26日保護者会にて園長より説明した。
- ・本園ホームページに3月中旬に概要を掲載する。

4 次年度の学校改善へ向けた園長の見解

(1) 中期経営目標の実現に向けて

- ① 幼児期の豊かな体験を保障し、確かな学びの芽につなげる幼児教育の実践
- ② 課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成
- ③ 区立・地域の幼稚園としての子育ての支援を推進

- ① 「幼児期の豊かな体験を保障し、確かな学びの芽につなげる幼児教育の実践」
幼児の育みたい資質、能力を視点に幼児理解を深め、今年度は2年連続で「遊びの充実に
向けた環境の工夫」について園内研究を進めている。講師とともに、教師の援助や環境につ
いて話し合いを深めてきた。幼児の遊びの中での学びを具体的に読み取る教師の確かな
目を養い、幼児と共に遊びの楽しさを発見していけるようにする。また、夢中になって
遊ぶことで豊かな感性や感覚、表現力を育めるように直接体験や自然体験を意識した環
境の見直しと改善を行っていく。さらに幼児が経験したことや感じたことを様々な形で
表現していき、遊びや生活を豊かにしていけるように保育の実践を行う。
- ② 「課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の
育成」チームさくらとして教員一人一人の資質向上を目指すとともに、協働性、共有を
大事にし、チーム力を上げていく。預かり保育、定例の保育との幼児の生活のつながり
を考慮し、連携を図り、幼児の生活の縦・横に寄り添うことのできる教師であることを
願いたい。また、「働き方改革」を意識し、能率のよい仕事の進め方で生活に余裕をもち、
保育を楽しめる教員でいられるようにする。また、保護者へ向けての保育の見える化の
ため、かわら版の作成、日々の記録の構築により、幼児の姿を見取る力をしっかりつけ
ていく。
- ③ 「区立・地域の幼稚園としての子育て支援の推進」については、就園前の親子の居場所
となるようにし、様々な形で幼児教育を発信し、地域の幼児教育をリードし、地域に根
ざした幼稚園・必要とされている幼稚園になるように具体的に方法を考えていく。近隣
の保育所と連携を取り、幼保小の連携を視野に入れた幅広い子育ての情報を提供し、家
庭、地域との連携を推進していく。

(2) 今後継続して追及していきたい課題

○幼保小連携教育の推進

遊びを通した指導を中心として生きる力の基礎を育むため、幼稚園教育において育みたい
資質・能力を押さえ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を目指し、小学校との幼
児児童間交流、教員間交流を行う。小学校教育との円滑な接続に向けて、ねりま接続期
プログラムを活用し小学校のスタートカリキュラムとの接続を推進する。その際、具体的
には近隣の小学校（光が丘秋の陽小学校）、保育所（第7、第11、第9保育園）と幼保小連
携教育を進めていく。

○子育て支援教育の充実

本年は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策により、保護者が幼稚園との直接的な連
携が難しく、今まで以上に保護者の子育てへの不安感が上昇していた。相談機関が身近に
なく、幼稚園に子育て支援のニーズが向けられていることが分かる。未就園児保育の充実、
行事内容の工夫等は引き続き行う。また、一緒に楽しみながら子育てのヒントや楽しさ
を感じられる機会を作り、地域で子育て支援を推進していく。園だより・ホームページ・ト
ークや保護者会などで情報発信していくことで、保護者自身の自己有用感を感じられるよ
うにする。

○特別支援教育の充実、幼児一人一人の特性に応じた指導の充実

特別な配慮を必要とする幼児もそうでない幼児も幼稚園の生活の中で共に育ち合うことを目指し、一人一人の幼児の特性を理解し、研修、共通理解を重ね、教職員がチームとしての質の高い保育を実践していけるようにする。また、関係諸機関との連携についても幼稚園が主体となり、リードする存在になっていく。